

「つながい感」は安心感！

不登校状態の子どもたちや保護者にとって、先生たちとのつながりは、一番の絆になります。今一度、先生方との関係性を振り返ってみましょう。

＜不登校状態の子どもたちへの対応＞



① 子どもとの関係づくり

不登校の子どもへの支援の第一歩は、「登校刺激を与えるかどうか」ではなく、「先生との人間関係の絆を着実に築いていくこと」です。時には、“お父さん・お母さん・お姉さん・お兄さん”のように、その子の好きなものや遊びの世界に寄り添いながら、その子にとって安心して心を許せる存在になることです。会えない子には、手紙なども効果的です。もちろん、登校の催促の手紙ではなく、つながりのメッセージが大事です。たとえ返事が来なくても、ほとんどの子はしっかり目を通していることが多いです。

② 子ども・保護者との連絡

電話連絡や家庭訪問で、会えなかったり期待した反応がなかったりすると、つい億劫になってしまったり、どうしていいかと及び腰になって、不登校の子どもへの対応が後手に回ってしまったりすることが起こりがちです。

先生の気持ちが、自分（我が子）に向かっていることが感じられるようなかわりが大事です。

③ 家庭訪問



いつ行く？	放課後・予約をしてから ・一日の終わりに近づくにつれて精神的に開放される ・子どもたちにも、子どもたちなりのスケジュールがある ・できれば、同じ曜日の同じ時間に
目的は？	担任が一番の味方 ・「私は決して見捨てない」ということを伝える
何をする？	本人に寄り添う ・本人の今の気持ちを分かろうと、耳を傾ける ・本人の歩調を大切に ・本人の得意なことにつきあう 「一人より二人が楽しい」気持ちが次につながる

<初期対応のアクション>

④ 休む原因があれば聞かすが、それがすべてではないことも認識を

- 子どもたちは、問われれば思い当たる理由を答えるのですが、「言った理由が全てかな」と多角的に思いを巡らしながら、言うことを受け止める必要があります。
- 保護者も、これからずっと休みが続くのではないかと不安になり、どうしていいかわからず混乱しています。保護者の気持ちを受容・共感し、「できるだけのことを一緒にやっていきたいと思います」と、姿勢を伝えることが大事です。

⑤ サインが出されてなかったか、今一度振り返る

- 最近の様子などから、手掛かりを探りましょう。例えば・・・

登校しぶりは？ 欠席・遅刻・早退の曜日は？
保健室の利用は？ マスクや服装？
授業中の態度は？ 休み時間は？ 昼食は？

友人関係は？ 部活は？
作文・日記・連絡帳にSOSは？
気になる行動やしぐさは？



SNS 関係は？ 家庭環境に変化はないか？
保護者から聞いた内容(生育歴等)で、関連することはないか？



⑥ 電話での応答は慎重に

- 子どもたちは、先生からの働きかけに敏感になっています。保護者の応答の様子で、先生の言葉や態度を浮かべています。電話で話し終えた親が、「〇〇先生って優しいのね」というような、プラスの反応をしてもらえるような対応が望ましいですね。
- 欠席連絡が手紙(欠席届)や、電話連絡の伝言であると、保護者と直接話すことはできませんので、あらためて先生の側から連絡をとることが大事です。子ども本人とも話したいものです。それができない場合は、保護者を通じてメッセージを伝えてもらうようにします。家庭の状況が許せば、この時点で家庭訪問をすると、子どもと保護者は安心できます。

⑦ 登校できやすい状況について、学校でできうることを教職員で考える

- 学習面で苦戦してないか、本人の得意なことや苦手なことは何かなど、各教科担当等からも情報を得ることが大事です。座席や班の工夫で、本人の安心感につながることもあるかもしれません。
- 本人が精神的に弱っている場合は、学校のハードルを少し下げ、本人に合わせた状況を探ることで、登校できやすくなる場合があります。例えば・・・

保護者による送り迎えや、保護者同伴での登校
別室登校(保健室や相談室等)
時間的な融通(遅刻や早退を責めない)
本人が得意な教科等のみの参加から

